

シリーズ第5回 — ヨハネ4：1-54 「たましいと体の癒し」

4:1 イエスがヨハネよりも弟子を多くつくって、バプテスマを授けていることがパリサイ人の耳に入った。それを主が知られたとき、4:2 ——イエスご自身はバプテスマを授けておられたのではなく、弟子たちであったが——4:3 主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。4:4 しかし、サマリヤを通って行かなければならなかった。4:5 それで主は、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近いスカルというサマリヤの町に来られた。4:6 そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた。時は第六時ごろであった。4:7 ひとりのサマリヤの女が水をくみに来た。イエスは「わたしに水を飲ませてください」と言われた。4:8 弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた。4:9 そこで、そのサマリヤの女は言った。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」——ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである——4:10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょうか。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょうか。」4:11 彼女は言った。「先生。あなたはくむ物を持っておいでにならず、この井戸は深いのです。その生ける水をどこから手にお入れになるのですか。4:12 あなたは、私たちの父ヤコブよりも偉いのでしょうか。ヤコブは私たちにこの井戸を与え、彼自身も、彼の子たちも家畜も、この井戸から飲んだのです。」4:13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出します。」4:15 女はイエスに言った。「先生。私が渇くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」4:16 イエスは彼女に言われた。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」4:17 女は答えて言った。「私には夫はありません。」イエスは言われた。「私には夫がないというのは、もっともです。4:18 あなたには夫が五人あったが、今あなたといっしょにいるのは、あなたの夫ではないからです。あなたが言ったことはほんとうです。」4:19 女は言った。「先生。あなたは預言者だと思えます。4:20 私たちの父祖たちはこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。」4:21 イエスは彼女に言われた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。4:22 救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。4:23 しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。4:24 神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」4:25 女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシヤの来られることを知っています。その方が来られるときには、いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう。」4:26 イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」4:27 このとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話しておられるのを不思議に思った。しかし、だれも、「何を求めておられるのですか」とも、「なぜ彼女と話しておられるのですか」とも言わなかった。4:28 女は、自分の水がめを置いて町へ行き、人々に言った。4:29 「来て、見てください。私のしたこと全部を私に言った人がいるのです。この方がキリストなのでしょうか。」4:30 そこで、彼らは町を出て、イエスのほうへやって来た。4:31 そのころ、弟子たちはイエスに、「先生。召し上がってください」とお願いした。4:32 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」4:33 そこで、弟子たちは互いに言った。「だれか食べる物を持って来たのだろうか。」4:34 イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみところを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。4:35 あなたがたは、『刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある』と言ってはいませんか。さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。4:36 すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに入れられる実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。4:37 こういうわけで、『ひとりが種を蒔き、ほかの者が刈り取る』ということわざは、ほんとうなのです。4:38 わたしは、あなたがたに自分で労苦しなかったものを刈り取らせるために、あなたがたを遣わしました。ほかの人々が労苦して、あなたがたはその労苦の実を得ているのです。」4:39 さて、その町のサマリヤ人のうち多くの者が、「あの方は、私がしたこと全部を私に言った」と証言したその女のことばによってイエスを信じた。4:40 そこで、サマリヤ人たちは

イエスのところに来たとき、自分たちのところに滞在してくださるように願った。そこでイエスは二日間そこに滞在された。4:41そして、さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた。4:42そして彼らはその女に言った。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです。」4:43さて、二日の後、イエスはここを去って、ガリラヤへ行かれた。4:44イエスご自身が、「預言者は自分の故郷では尊ばれない」と証言しておられたからである。4:45そういうわけで、イエスがガリラヤに行かれたとき、ガリラヤ人はイエスを歓迎した。彼らも祭りに行っていたので、イエスが祭りの間にエルサレムでなさったすべてのことを見ていたからである。4:46イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、かつて水をぶどう酒にされた所である。さて、カペナウムに病気の息子がいる王室の役人がいた。4:47この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのところへ行き、下って来て息子をいやしてくださるように願った。息子が死にかかっていたからである。4:48そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない。」4:49その王室の役人はイエスに言った。「主よ。どうか私の子どもが死なないうちに下って来てください。」4:50イエスは彼に言われた。「帰って行きなさい。あなたの息子は直っています。」その人はイエスが言われたことばを信じて、帰途についた。4:51彼が下って行く途中、そのしもべたちが彼に出会って、彼の息子が直ったことを告げた。4:52そこで子どもがよくなった時刻を彼らに尋ねると、「きのう、第七時に熱がひきました」と言った。4:53それで父親は、イエスが「あなたの息子は直っている」と言われた時刻と同じであることを知った。そして彼自身と彼の家の者がみな信じた。4:54イエスはユダヤを去ってガリラヤに入られてから、またこのことを第二のしるしとして行われたのである。者がともに喜ぶためです。

導入

これまでの学びで、ヨハネの福音書から多くのことを教えられました。その内容を振り返ってみましょう。

1. この福音書が書かれた目的は、私たちがイエスを信じ、御名にある新しいいのちにあずかることでした。
2. バプテスマのヨハネがイエスについて語りました。ヨハネは、イエスがこの世に来られたおもな目的は、私たちを罪の罰から救うためだと言います。イエスは、世の罪を取り除く「神の小羊」です。
3. イエスは、人の心の動機を探られます。イエスは私たちのことをすべてご存知です。
4. 2章から、イエスは喜びと裁きの両方をもたらす方であることがわかりました。
5. 3章では、宗教は人を救うことができず、私たちは「新しく生まれる」必要があることがわかりました。

先ほど読んだ箇所は、イエスがサマリヤを通って旅をされ、罪深い女性の心に手を差し伸べられた話でした。その後、ガリラヤを訪れたイエスが、王室役人の息子を癒された話もありました。話を詳しく見る前に、ユダヤ人とサマリヤ人の関係について背景を理解しておくといでしょう。

サマリヤの歴史

イエスが地上におられた時代、サマリヤは独自の政府を持っておらず、ユダヤの一部でした。しかし、ユダヤ人とサマリヤ人は、歴史や宗教の背景によって居住区域がはっきりと別れていました。

列王記第一16:24には、オムリ王が北王国の新しい首都をサマリヤと名付けたと記されています。後に、サマリヤの名は周辺地域を指すようになり、ときには北王国全体を指して使われることもありました。紀元前722年にアッシリヤ軍がサマリヤを征服し、ユダヤ人の中で学識のある者や高官たちはすべてバビロンに連行されました。残されたユダヤ人は教育を受けていない貧しい者たちばかりでした。アッシリヤ軍はその地に多くの外国人を住まわせました。ユダヤ人は、その地に移り住んだ外国人た

ちと結婚し、外国の神々を拝むようになりました（列王記第二17-18章）。捕囚から解放されて戻ってきたユダヤ人は、その地に住んでいた人々をハーフユダヤ人の反政府勢力とみなしました。つまり、ちゃんとしたユダヤ人ではないと考えたのです。彼らの宗教も中途半端なユダヤ教でした。紀元前400年ごろ、サマリヤ人はユダヤ人に対抗してゲリジム山に神殿を建てました。彼らはモーセ五書のみを信じ、預言書などの旧約聖書は受け入れませんでした。サマリヤ人はエルサレムではなくゲリジム山を聖地とし、生粋のユダヤ人と対立関係にありました。

ですから、4節でイエスがサマリヤを歩いていかなければならないとおっしゃったとき、みんなはあまり賛成ではなかったでしょう。

ヨハネはここで、高等教育を受けた生粋のユダヤ人（先週のニコデモ）と、無学なハーフユダヤ人のサマリヤ人女性を対照的に描きます。ふたりは対極にあると言えますが、イエスはその両者ともに興味を注がれます。

ですから、私たちの環境や学歴、背景がどのようなものであっても、イエスは私たちに目を向けてください。どうかそのことを知って、励ましを受けてください。高学歴で裕福な人。安月給の人。無職の人。どんな状況であれ、私たちはイエスが必要ですし、イエスは私たちの人生に心を向けてください。そう思えないかもしれませんが、みことばはそうだと語ります。

4章には、ふたつの奇跡が見られます。

1. たましいが癒された奇跡。イエスを神の御子として信じる信仰によって罪という病から癒された。
2. イエスを信じる信仰によって肉体が癒された奇跡。

どちらの奇跡も、イエスを神の子として信じる信仰が必要でした。今日私たちは、生き方が変えられる奇跡を中心に生きていきたいと思えます。（1-42節）

まず、イエスが行かれたのがサマリヤのどこかがわかります。5節に、イエスはサマリヤのスカルという町のある場所に行かれたとあります。そこは、ヤコブの井戸と呼ばれ、今もその場所があります。地下水をくみ上げる井戸のある場所です。

イエスは、一日で一番気温の高い正午にその場所に着きました。長旅で疲れておられます。イエスは完全に神であられ、人の姿をとった神であると聖書は明言しますが、同時に完全に人でもあられます。人間が感じる疲れや痛み、感情のすべてを感じられました。

女性がひとりで真昼に井戸に来ることは通常はありません。この女性はおそらく地域社会でつまはじきにされていたので、ひとりだったのでしょう。彼女がそこにいることをイエスは知っておられました。1章で、私たちがどこにいるかイエスはいつでもご存じあることを教わりました。

イエスは井戸で、この女性に飲み水をくださいとまず話しかけられました。イエスは、井戸から水を汲めるような大きな水がめを持っておられませんでしたから、これはとても現実的なお願いです。9節で、イエスがお願いをしたことはもとより、まず彼女に話しかけたことにサマリヤ人女性は驚きました。

これに対するイエスの返答は霊的な内容です。イエスがニコデモと交わされた会話によく似ています。「もしあなたが神の賜物を知り、」とイエスはおっしゃいましたが、これはみことばを指しています。神の賜物とはおそらくトーラー、つまり聖書の最初の5つの書のことです。

もしこの女性が「トーラー」を知っていれば、返答が違っていただろうというわけです。神の賜物は救いの賜物という意味もありますが、このときは、おもにトーラーについて話しているので、女性もそのことがわかったはずで。

イエスは、霊的な話をしておられますが、女性は人間的な考え方をしていました。

イエスは女性におっしゃいました。トーラーが語るメシヤが私だとわかったなら、あなたが私に求めるはずだ、そうすれば私はあなたに「生ける水」を与えたい、と。

「生ける水」は、旧約聖書に登場する比喩表現です。旧約聖書には、この「生ける水」を指す箇所がたくさんあります。

その一例のみ、ここで見てみましょう。

エレミヤ 2:13まことに、わが民は二つの悪を行った。生ける水の源であるわたしを捨てて／無用の水溜めを掘った。水をためることのできない／こわれた水溜めを。

エレミヤが言う民とは、墮落したユダヤの民のことです。彼らは、変わらず善いお方である神から注がれる新鮮な水を拒み、自らよどんだ水を選びました。よどんだ水は彼らのたましいを満たすことはありませんでした。

井戸端の女性にとって、自分のたましいの状態について指摘されるより、現実問題に目を向けるほうが簡単でした。

イエスは、女性の問いかけを無視せず、その問いかけを足がかりにして霊的な真理を示されました。人は飲み水を飲んでもまたのどが渴いてもっと飲む必要があります。毎日それを続けます。

14節で、イエスはこの女性に二度と渴くことのない水をあげるとおっしゃいました。15節で、女性はまだ人間的な考え方をしています。そんな水があるならばばらしい、それを私にください、と言います。16節で、イエスは人が一度だけ飲んで再び飲む必要のない超自然的な水を得る条件について話し始められます。これはもちろんご存じのとおり、普通の水ではありません。霊の水、つまり、聖霊にいただくまことの命です。

まずイエスは、女性の罪深い生活を指摘されます。あなたには夫が5人いたが、今は夫でない男性といっしょに住んでいるとおっしゃいました。5人の夫とどういことがあったのか、想像はつきます。傷つけられ、失望し、疎外感を感じたことでしょう。

19節で、サマリヤ人の女性は、自分の触れられたくない感情やたましいの状態についてイエスが語っておられることに気づきます。そしてすぐに、自分を守るべく、宗教論争へと話題をすりかえようとします。彼女は、礼拝する場所を挙げて、ふたつの宗教について話します。ユダヤ人はエルサレムの神殿で礼拝すべきと信じ、サマリヤ人はゲリジム山で礼拝すべきと信じていました。このとき女性が知りたかったのは、自分が罪人かどうかではありませんでした。罪を赦してその問題を解決してくれるのは誰かということでした。自分の宗教か、それともユダヤ人のメシヤかを知りたかったのです。

イエスは「救いはユダヤ人から出る」（22節）とはっきり答えられます。この言葉は、偽りの神に毒された「サマリヤ人」である女性の宗教に疑問を投げかけるものです。また、礼拝で大切なのは場所ではなく人であることを明らかにされました。私たちもこのことを覚えておく必要があります。さらに、礼拝で大切なのは真理であると明言されました。この女性に真理はありませんが、イエスは真理のお方です。イエスは、「霊とまこと」によって神を礼拝する人を神が「求めておられる」とおっしゃいました。

25節で、女性はユダヤ人のメシヤについて多少知識があることを認めます。メシヤはすべてをご存じのお方だと彼女は言います。そのご性質はすでにイエスがこの女性に表されました。こうしてイエスは、ご自身がメシヤであることを明かされます。

ここでイエスの弟子たちが戻り、イエスがサマリヤ人女性と話していることに驚きます。

28節で、女性は水を汲むために持ってきた水がめを置いたまま町に戻ったとあります。この女性は、町の人々にイエスのことを伝えました。自分のしたことをすべて言ってみせた人と出会ったできごとを伝えます（29節）。彼女は、イエスがメシヤだと信じたようです。

この箇所から、イエスがこの女性を愛しておられたことがわかります。イエスは彼女を罪から救いたいと望まれました。また、彼女の心を満たし、証人として用いたいと願われました。イエスが人々に知らせたかったのは、どれほどの罪を犯しても、イエスのもとに来て「赦し」をいただくことができるということです。クリスチャンになれないほど悪い人はいません。

私たちは神の御前に罪を認めて、イエスを信じ、赦していただく必要があります。私たちが赦されるのは、罪の罰を代わりに受けて十字架上でイエスがなしてくださった御業のおかげです。

私たちは悔い改めなければなりません。それは、後悔するだけでなく、罪に背を向けて歩むことです。そうすれば、イエスに従い、自分の欲望ではなくみこころに従うことになります。

39節で女性がイエスについて証した言葉と、イエスご自身が町の人々に直接語られた言葉によって、多くのサマリヤ人がイエスを信じました。ヨハネの福音書の目的が、当時の人々の間で成就されたのです。

私たちはどうでしょう。私たちはイエスを信じていますか。自分の罪を認めて悔い改め、罪の赦しを神に求めようと思えますか。

罪からたましいが解放された証はどれもすばらしいものです。聖書は、ひとりの人が悔い改めると、天に喜びがあると語ります（ルカ15：7）。しかし、非常に罪深い生き方やつらい人生を経てクリスチャンになった人のほうが、赦しを感謝する心や、喜びを人と分かち合おうという気持ちが大いようです。

ニコデモのように教養があつて信心深くても、サマリヤ人女性のように無学で罪深くても、私たちは皆、イエスの赦しを必要としています。赦された喜びを他の人と分かち合う必要もあります。私たちが赦されたことを喜んでいないなら、イエスを信じたいと誰も思わないでしょう。いつも飛び跳ねて、ハレルヤと叫んでいる必要はありませんが、日々、赦されていることを感謝しなければなりません。赦されていることがどれほどすばらしいかを知っていれば、人に対しても赦しの心を持てるでしょう。また、福音を他の人に伝えようという思いも増すはずです。春は、信仰について分かち合えるいいチャンスです。桜の木の下に人が集まります。イエスの愛をその人たちと分かち合おうと思う人はいませんか。偽りの宗教にそのチャンスを奪われてはいけません。この春、イエスの愛を分かち合いたいと思う人は、礼拝後、私に話しかけてください。

46節からは、イエスがガリラヤを訪れた話です。「再び」とあるので、改めて別の日に訪れられたことが分かります。今回の訪問は、体の癒しのためでした。ヨハネは、このできごとを「第二のしるし」（54節）と呼びました。

ある王室の役人の息子が病気になるに危篤でした。王室の役人と訳されたギリシャ語の原語は、彼が王に仕える人であったことを示します。王とはおそらくヘロデ・アンティパスのことでしょう。この役人は、家に来て息子を癒してほしいとイエスに懇願します。

48節で、イエスはこの役人をはじめ、ガリラヤの人々をやんわりと非難されます。「あなたがたは、～しないかぎり、」とおっしゃいました。

イエスがガリラヤ人を批判されたのは、彼らが奇跡にばかり気を取られていたからです。イエスを神の子と信じる信仰へと私たちを動かしてくれるのは、奇跡自体ではありません。とは言え、イエスが神の子であることを弁証する手段として、奇跡が大切であることは見過ごせません。イエスが神であることを人々に示す上で、奇跡も役に立つことをイエスをご存知でした。

50節で、イエスは王室の役人に息子はすでに癒されたとおっしゃいます。この時点で、役人はイエスの言葉を信じましたが、イエスを神の子として信じる信仰を持ったとは考えにくいでしょう。しかし後になって、息子が癒された時間を確認した際、イエスが神の子であると確信し、信じました。彼は家族にそのことを話し、家族も信じました。

死にそうになっている男の子を、イエスは離れた場所から会いもせず瞬時に癒されました。すばらしい話です。イエスは何でもおできになります。イエスは神だからです。この奇跡によって、イエスはそのことを証明されました。

イエスは今も生きておられ、病気を癒すことがおできになりますが、いつでもそうなさるとは限りません。神は主権をもって、ひとりひとりを取り扱われます。癒しが与えられないと、イエスを信頼で

きなくなることもあります。けれども、それぞれの人生を扱う中で、神はもっと高いご計画を持ってくださっています。神の道は私たちの道とは異なるのです。

サムエル第二22：31には、「神、その道は完全。・・・」とあります。

ハバクク3：6は「・・・主の道は永遠に変わらない。」と語ります。

イザヤ55：8-9のみことばは語ります。

「55:8「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——【主】の御告げ—— 55:9天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」

私たちの考え方が神のみことばに沿っていないなら、私たちが考え方を改める必要があります。

悪魔は、私たちに否定的な考えを持たせ、私たちが神の愛を疑うよう仕向けます。それでパウロは、「すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ」なさいとコリント第二10：5で言ったのです。日本における霊の戦いは非常にリアルです。私たちは、自分の心や考え方が神とみことばで満たされて導かれるよう気をつけなければなりません。サタンが私たちに吹き込む嘘に影響されてはいけません。少し本題から逸れましたが、悪魔が私たちの考えを攻撃してくることを知っておくとよいと思います。思考パターンにおいて、私たちは勝利を得なければなりません。

適用

このふたつのできごとから、私たちは今日何を学べるでしょうか。

当時の人々には、イエスが旧約聖書に約束されたメシヤであることが示されました。イエスはご自身がまことのメシヤであると明かされ、ユダヤ人もサマリア人も霊とまことによってイエスを礼拝するよう招かれました。

これは、当時の弟子たちにも、今日の私たちにも関わりのある内容です。

サマリア人女性は、イエスのことばを信じました。ガリラヤ人は、信じる前にしるしや奇跡を求めたので、叱責されました。

私たちはサマリア人女性のようにでしょうか。それとも、ガリラヤ人や王室の役人のようにでしょうか。私たちは神のみことばである聖書を喜んで信じますか。それとも、奇跡が起こらないとイエスが神の子であると信じないでしょうか。最大の奇跡は、一時の体の癒しではありません。永遠のたましいの癒しこそ、最大の奇跡です。

大切なのは、「私たちがイエスを信じる信仰を持ったか」です。

もし持っているなら、「弟子として成長しつつある」でしょうか。

「御霊の実」が私たちに表れていれば、それは成長している証です。もしそうでなければ、聖霊の取り扱いを受ける必要があります。これらの「実」は神のものであり、私たちから発生するものではありません。

私たちは人に偏見を持っているのでしょうか。イエスの愛をもって愛することも難しいと思うような、日本の社会で見下された人々はいますか。人間的な愛では、軽蔑された人を愛することはできません。イエスのように人を愛そうと思うなら、心にイエスの愛が必要です。また、信仰を分かち合っその愛を解き放たなければなりません。善い人に対してだけでなく、見下された人々に対してもです。

というわけで、今週の課題は、愛することです。信仰心のある善い人たちだけでなく、いやな人たちも愛しましょう。そういう人たちと旅行には行きたくないかもしれませんが、イエスの愛を分かち合うことはできるはずですよ。